

[成果情報名]早生で日持ち性に優れるモモ新品種「甲斐トウ果 17(モモ山梨 17号)」の開発
[要約]「甲斐トウ果 17」は、「日川白鳳」の3日程度後に収穫始めとなる早生品種である。早生品種としては大玉で食味がよい。果実硬度が2.0kg程度から軟化しない特性を持つ硬肉モモで、樹上の日持ち性に優れる。

[担当]山梨県果樹試験場・育種部・落葉果樹育種科・新谷勝広

[分類]技術・参考

[背景・ねらい]

モモの早生品種は、中晩生品種に比べ日持ち性が劣ることが、栽培・流通上の課題となっている。特に、「日川白鳳」は核割れの発生も多く、それが果実の急激な軟化や果実品質の低下に繋がり問題となりやすい。そこで、早生で日持ち性に優れる本県のオリジナル品種の開発を図る。

[成果の内容・特徴]

1. 「甲斐トウ果 17」は、平成18年に大玉で着色良好な「モモ山梨6号(ちよひめ×八幡白鳳)」に早生の主要品種である「日川白鳳」を交雑して選抜した硬肉モモである(図1)。種苗法に基づく品種登録において、平成30年2月13日に出願公表された。
2. 成熟期は果樹試験場(標高440m)において7月上旬で、「日川白鳳」より3日程度後に収穫始めとなる(表1)。
3. 果実重は300g程度と早生品種としては大玉となる(表1、図2)。糖度は13°Brix程度、酸度はpHで4.5程度であり、硬肉モモとしては果汁も多く、食味は良好である。果形は円～短楕円で、花粉を有する。
4. 樹上での果実硬度は2.0kg程度までは低下するが、それ以下にならない特性をもち、普通モモのように完全に軟化した柔らかい果実にはならない(図3)。

[成果の活用上の留意点]

1. 硬肉モモであるため、流通・販売等においては既存の普通モモと区別した対応が必要となる。
2. 有袋栽培を基本とするが、果実袋の使用方法については今後検討が必要である。
3. 収穫については、硬度が指標になりにくいいため、地色の抜けを目安とする。
4. 樹上で果実を長期間放置すると果肉内の紅色素や褐変が増加し、また樹勢低下を招くおそれがあるため、遅もぎにならないように注意する。
5. 収穫後の貯蔵性については、今後詳しく検討する必要がある。

[期待される効果]

1. 硬肉モモの販路を開拓することで、日持ち性の良い優良な早生品種として期待できる。

[具体的データ]

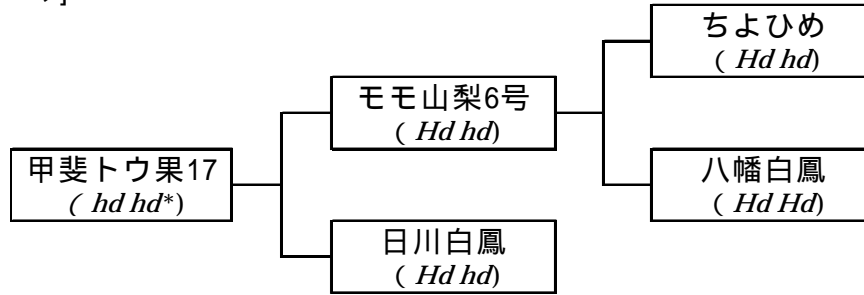


図1 「甲斐トウ果17」の系統図

* 図中のアルファベットは遺伝子型を示す。'Hd' 普通モモ 'hd' 硬肉

硬肉モモとは樹上および収穫後にエチレン生成量の増加が起こらず軟化しないモモのことで、普通モモに対して劣性形質のため、硬肉遺伝子をホモで有する場合に硬肉モモとなる。

表1 「甲斐トウ果17」の生育・果実特性 (2014~2017年)

品種名	満開日	収穫始め	成熟日数(日)	果実重(g)	硬度(kg)	糖度(度)	酸度(pH)	果形	着色	花粉	核割	裂果
甲斐トウ果17	4/12	7/2	81	309.2	2.4	13.7	4.5	円~短楕円	中	有	中	無
日川白鳳	4/10	6/29	80	293.9	2.0	13.9	4.5	短楕円	多	有	多	無

「甲斐トウ果17」：自根8~11年生 有袋(二重袋)栽培

「日川白鳳」：おはつもも台5~8年生 無袋栽培



図2 「甲斐トウ果17」の果実外観(有袋)

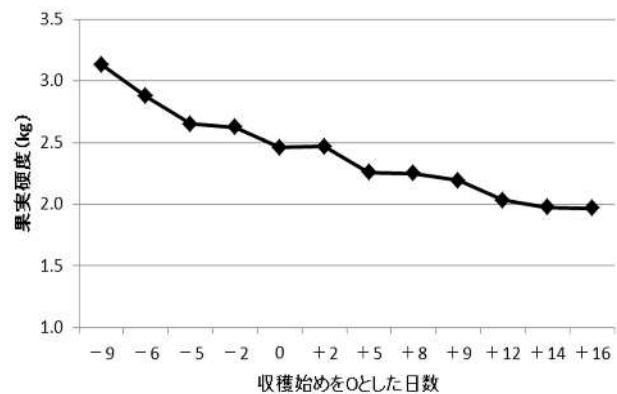


図3 「甲斐トウ果17」の樹上での果実硬度推移(2016年)

[その他]

研究課題名：モモ新品種の育成

予算区分：県単

研究期間：1988年度~

研究担当者：新谷勝広、秋山友了、三宅正則、雨宮秀仁、太田佳宏、竹腰 優、佐藤明子、猪股 雅人